

キャサリン・マンズフィールド作
桃山まや訳

ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

第一話 食卓のドイツ人

食卓にパン入りスープが置かれた。

「オオッ、これぞこれ」と、身を乗り出してスープボールの中を覗き込んで、堅物ラット氏がいった。

「これぞ我輩は求めてやめぬスープでなくてなんであるう。いやなに、このところ我が愛しの胃の腑の調子がよくなって、パン入りスープとはありがたやありがたや。とろみのつけ方もうまい塩梅だ。我輩はこれでなかなか料理にはうるさい方で」

そういつて、ちゃきちゃきのドイツ人ラット氏がわたしの方を向いた。

「まあ、それは存じませんでしたわ」

わざとらしくない程度に、さも驚いたといった調子で応じた。

「左様さようでしょう。結婚なんぞしてない者にとって、料理は必要条件ですな。我輩ときたら、我が欲するところのもの万事、女性たちから学んでいまして、それも結婚抜き、でありまして」

ラット氏はナフキンを襟にたくしこんで、スープをふうふう吹き冷ましながら話をつづけた。

「我輩は、正九時、エングリシュ式のブレックファーストなるものを我輩自身で作りますな。たいした量じゃない。薄切りのパンが四枚、卵が二個、ハムが一枚、それにスープ一皿、紅茶を二杯つてとところ あなたがたエングリシュには、これくらいはどうってことない」

ラット氏の有無を言わさぬその言い方に、わたしは言葉を返す気にもなれなかった。みんなの視線がとつぜんわたしに向けられた。まるで大英帝国のたっぷりした朝食の責任を一人で負わされているような気分だ わたししたら、ブラウスのボタンをかけながら「ヒー一杯飲むのがやっとだというのに。」

「それくらい何でもありませんよ」

ベルリンからやって来たホフマン氏が大声で口を挟んだ。

「いえね、ぼくだって、イギリスにいた時分には毎朝そのくらい食べてましたよ」

ホフマン氏は上着とチョッキにしたたり落ちたスープを拭いながら、眼を上げ口ひげのぞかせた。

「イギリスの方ってそんなにたくさん食べるんですか？」

ミス・シュティーゲラウエルがたずねた。

「スープにパンに豚肉に、紅茶にコーヒー、それから煮込んだフルーツ、蜂蜜に卵、冷やしたお魚、キドニーパイ、温めたお魚、それとレバーなんですって？ご婦人もそうだってききましたわ。婦人とは、本当かしら、信じられませんか」

「ご尤もご尤も。しかしながら我輩はこの目でしかと観察ば、しております。かのレスタ

ー・スクエアの某ホテルに滞在してましてな」

ラット氏が大声で言った。

「かのホテル、なかなかのものであったが、我輩、あえて難を申せば、お茶なるものに今ひとつ……」

「あら、お茶のことだったらわたしに任せていただきたいわ」

明るく笑いながら、わたしが口をはさんだ。

「これでもお茶を入れるのだけは得意なんですよ。取って置きのの秘訣はティーポットを暖めておくことかしら」

「なぬ、ティーポットを暖めるとは」

ラット氏はスープ皿をわきにどけながら言った。

「いったい何故あってティーポットをば暖めるのか？ハツハツハツ！こりゃ大いなる驚きですな。ティーポットを食する御仁はなきものと、我はかく思考いたすが」

ラット氏の青い目が冷ややかにわたしを捉えた。どうやら、イギリスもるともわたしをやつつけてやるうとあれこれ策略をめぐらせているらしい。

「左様なことがイギリス式のお茶の秘訣であるとは。ティーポットを暖めるのみ、とは驚きじゃないですか」

乗馬にたとえて、軽い足慣らしのようなものだと聞いたかったのだけれど、この『足慣らし』という言葉がどうしてもドイツ語で出てこなかったので、わたしは黙っていた。

給仕が子牛の肉にザワークラウトとジャガイモを添えて持ってきた。

「ザワークラウトは好物なんですけど」

北ドイツからやってきた旅行客さんが口を開いた。

「いくら好きでも、これだけしょっちゅう食べているといい加減うんざりしてきますね。もう見ただけで」

「なんていいお天気かしら！」

このまま黙っていたら何を言われるかわからなかったので、わたしはあわててミス・シュティーゲラウエルに助けを求めた。

「今朝は早かったの？」

「ええ、いちど五時に起きたんですけど、濡れた芝生の中をほんの少し歩いただけでまた寝てしまいましたの。次に目が覚めたのが七時だったかしら、身体を洗ってベッドでぐずぐずしているうちに八時になったので冷水湿布をして、八時半にメントーティーを飲んで、それから九時にモルトコーヒーを飲んで、いつもの『治療』を始めましたのよ。ザークラウトをとってくださらない？あなたもいかが？」

「いいえけっこうよ。まだ少し酸っぱすぎて」

「ちよつと小耳に挟んだんですけど」

未亡人がわたしに話しかけてきた。ヘヤーピンを楊枝代わりにして歯をつついていて。

「あなたは菜食主義者なんですか？」

「ええ、三年前からお肉は食べていません」

「まさか、冗談でしょ！それでお子さんはいらっしやるの？」

「いいえ」

「やつぱりね。だから子供ができないんですよ。野菜しか食べない人が子供を生んだなんて話は聞いたことがないですもの。できるはずがないのよ。お国のイギリスにはもう大家族なんかないんでしょうね。婦人参政権問題とかで、皆さんお忙しいようだし。わたしなんか子供を九人も生みましたよ。おかげさまでみんな元気に育ちましてね。元気な赤ん坊ばかりだったから　まあ、そうはいつても子供を持ったが最後　」

「素晴らしいわ！」わたしは未亡人の言葉をさえぎるように甲高い声を上げた。

「素晴らしいだなんて」

未亡人は軽蔑したようにわたしを見ながら、頭のとっぺんにうまくのっかっているお団子の中にヘヤーピンを戻した。

「このくらいのことでは驚いてどうします！わたしの友達には四人いっぺんに生んだひとがいるんですよ。あのときのご主人の喜びよつたらなかったわ、夕食に大勢招いて、赤ん坊をテーブルの上にならずらりと並べてお披露目したんですから。友達も鼻が高かったと思いますよ」

「ドイツは家族を大切にする国なんです」旅行者さんはそう言うと、ジャガイモをナイフに突き刺してかじりついた。

だれもがその言葉をかみしめるように黙っていた。

料理は牛肉、赤スグリ、そしてほうれん草を盛った皿にかわった。ドイツ人たちは、ナイフを黒パンですっかりぬぐってから牛肉に取り掛かった。

「この後、ご滞在のスケジュールは？」ラット氏がわたしにきいた。

「はつきりとは決めてりませんの。九月にはロンドンに戻らなくてはならないんですけれど」

「もちろんミュンヘンには行かれますでしょうな」

「その時間はなさそうですね。『治療』を中断するわけにはいきませんでしょ」

「ミュンヘンは、絶対に行くべきですな。ミュンヘンを見ずしてドイツを見たとは言うべからず。ミュンヘンには、あらゆる美術館、博物館があり、ドイツの芸術と精神がミュンヘンにあるのですぞ。八月にはワグナー祭があるし、モーツアルト、それに日本絵画の展覧会もある。さらにさらに、なんといいってもビールですーミュンヘンを訪れることなくしてビールの良し悪しを語るべからず。しかして午後になると、左様、上品な婦人方が集い来たり、並ではない、もっと丈のあるグラスでビールを飲んでいる。」「ごらんあれ」

そういつてラット氏は洗面台においてある、あの大きな水差しを指差したのだが、わたしは思わず笑ってしまった。

「ミュンヘンビールをたくさん飲むと汗をかきますからねえ」

ホフマン氏が言った。

「ここならどんなに汗をかいたっていいけど、街のなかだとたまりませんよ」

急に思い出したように、ホフマン氏は食卓用ナフキンで顔や首の汗を拭ってから耳の中までこしこしふいた。

煮込んだアプリコットをのせたガラスの皿がテーブルに置かれた。

「果物ですわ！」

ミス・シュテイーゲラウエルが言った。

「健康のためには果物をたくさん食べなくちゃ。食べれば食べるほどいいんですって。今朝、お医者さまに言われたばかりですの」

彼女がその忠告に従ったのは明らかだった。

旅行客さんが言った。

「あなたたちイギリス人もわれわれの侵攻を恐れているんでしょう？まあ、聞かなくたってわかってますけどね。このところ新聞がイギリスのことをいろいろと書きたてていますから、あなたも読んでしょう？」

「ええ」

わたしは居住まいを正して答えた。

「このさいだからはっきりいっておきますけど、イギリスはドイツなんか恐れていませんわ」

「ほう、左様なれば、さらに用心せねばなりませんまい」

と、ラット氏が言った。

「我輩は真実をば語っておりますが、イギリスには軍隊と呼べる代物はこれなし。若年

兵には、ニコチン毒素を血管内に充満させている者もままあるとか」

「心配はいりません」

ホフマン氏が言った。

「われわれはイギリスなんかねらっちゃいませんから。ほしけりゃ、とっくの昔にいただきますって」

ホフマン氏はわたしを見ながらスプーンを軽く左右に振った。まるで小さな子供に向って、

自分がその気になればお前のことなどどうにでもなるんだよと言っているようだ。

「わたしたちだって、ドイツなんかほしいとは思いません」わたしも負けてはいなかった。

「我輩は、午前のうちに医師の推奨せる規定の温浴をばすませたれば、午後は改めて膝と腕をば温水に浸し……」

その場の空気を和らげようとしたのか、聞かれもしないのに、ラット氏が自分の予定を話した。

「しかしてその後、一時間ほど運動をば行い、これにて我が日課は見事に終焉という次第。あとは、ワインとサーデインをのせたロールパンを」

生クリームがのったさくらんぼのケーキがめいめいに配られた。

「ご主人のお好きな食べ物は何なの？」未亡人さんがわたしにきいた。

「さあ、なんだったかしら」とわたし。

「まあ、ご存じないの？結婚して何年？」

「三年です」

「まさか、本気でそんなこと言ってるんじゃないでしょう。夫の好物を知らなかったら一週間だって主婦は務まりませんよ」

「でもきいたことがないんです。食べ物のことをとやかく言う人ではありませんし」

沈黙。誰もがさくらんぼの種をほおばったまま、頭を振りながらあきれたようにわたしを見ていた。

「これじゃ、パリの女性解放運動がイギリスに伝染するのも無理はないわね」

未亡人さんがナフキンをたたみながら言った。

「結婚して三年も経つのに、好物も知らないようでは、夫をつなぎ止めておくことなんかできませんよ」

もう話したくさん。わたしはついと立ち上がった。未亡人さんがとがめるように声をかけた。

「ごちそうさまー」

「ごちそうさまー」

そう言い残して、わたしは部屋を出て後ろ手でドアを閉めた。

『ドイツの保養地で』を訳すにあたって

桃山まや

キャサリン・マンズフィールドは一八八九年十月十四日にニュージーランドに生まれた。裕福な家庭で何不自由なく育てられたが、どちらかというと反抗的で気難しい子供だったようだ。一時期音楽家になる夢をいだいたこともあったが、父親の猛烈な反対に思い断念。やがて作家を目指すようになっていった。一九〇八年に両親の反対を押し切って二度目の渡英を果たすと、作家になるためには必要な経験だといわんばかりに、無軌道な生活を送るようになっていく。深い考えもなしに年上の音楽教師と結婚、別居、そして夫ではない男性の子供を妊娠。知らせを受け、ニュージーランドから駆けつけた母親にドイツのパウアリアの修道院へ入れられるが、そこには流産という悲しい結末が待っていた。静養のために人目を避けるようにして訪れたのが『ドイツの宿にて』の舞台となるベリスホーフエンである。ここでヨーロッパ各地から訪れていた作家たちと知り合い、チエーホフの作品に親しむようになっていった。

『ドイツの宿にて』には十三の短編がおさめられている。そのうちの七編、「食卓のドイツ人」「男爵」「男爵夫人の妹」「フィッシャー夫人」「大気浴」「近代的な女性」「進歩的な夫人」は、キャサリン・マンズフィールドがパウアリアのベリスホーフエンに滞在しているあいだに着想を得たもので、同宿していたドイツ人たちの俗物ぶりを、「わたし」の目を通して皮肉たっぷり語っている。残りの六編もドイツを舞台にした物語だが、こちらはそれぞれ短編小説として独立したかたちをとっている。

物語は会話を中心に進められていく。性格描写はほとんどなく、やり取りされる会話を通して人物像を浮かび上がらせていくという手法がとられている。この作品については、とかくドイツ人向けられる「わたし」の皮肉なまなざしが強調されがちだけれど、たぶんそういう読み方がマンズフィールドを一番悲しませるのではないだろうか。好感をいだくことのできないドイツ人のなかで、戸惑ったりうんざりしたり、ときには幸せを感じる「わたし」の姿をも、一つの対象としてシニカルな目で見つめる作者のまなざしを感じ取ってこそ、この作品を本当に味わうことができるような気がする。

テキストには Hesperus Classics の “In a German Pension” を用いた。

付記：マンズフィールドは生前、この “In a German Pension” を単行本で出版するのを嫌がっていたようです。その後の彼女の作品とくらべて、人物描写にしろ情景にしろ「生っぽさ」があるのが気になっていたのではないかと思えますが、たしかに、訳してみると難しい。たとえば本編では登場人物は「わたし」や The Herr Rat、Herr Hoffmann、Fraulein Stiegelauer、それと The Widow、The Traveller の六人、それが食事をしながら、わずか五頁のスケッチでおしゃべりしているのです。人物描写が物足りないのは当然だし、人物も具体的に名前があるのは三人です。冒頭に出てくる定冠詞つき The Herr Rat が曲者でこれをうまく日本語にできれば、後の会話の場面が生々しくしてくるのではないか。The Herr Rat が英国人が抱く語感ほどのようなものか、それを考えてみようかと桃山さんに注文をつけて何度かやり取りし、もしかししたら英文科の教室では「乱暴な」といわれそうな翻訳に挑んでもらいました。これなら「市販に耐える」と翻訳雑誌の編集長として OK を出したのが桃山訳です。

藤岡啓介記

